

虚弱高齢者の自己決定を尊重した 介護福祉士の実践構造と関連要因

カサハラ サチコ ハタ チエミ
笠原 幸子*1 畑 智恵美*2

目的 本研究では、超高齢社会を支えるために、専門職としての成熟が求められている介護福祉士が、虚弱高齢者の自己決定をどのように支援しているのか、介護福祉士の実践の構造を明らかにし、その実践に関連する要因を検討することを目的とする。

方法 A県介護福祉士会の会員を対象に自記式調査票を用い、2017年7月15～31日に郵送調査を実施した。分析は、第1に、虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践の構成因子を実証的に捉えるために、因子分析を行った。第2に、介護福祉士の実践の関連要因として有能感を取り上げ、その構成因子を実証的に捉えるために、因子分析を行った。第3に、介護福祉士の実践の構造に関連する要因を検討するために、従属変数には介護福祉士の実践の因子ごとの合計素得点を、独立変数は「職場外のスーパービジョン」「実践の振り返り」、介護福祉士の有能感の因子ごとの合計素得点等を投入し、強制投入法による重回帰分析を行った。

結果 第1の因子分析の結果、虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践は、「意向と主体性の把握」「主体的実行を引き出す支援」「関係づくり」の3因子が抽出された。第2の因子分析の結果、「業務の達成」「仕事上の予測と問題解決」「自己啓発と能力発揮」の3因子が抽出された。第3の重回帰分析の結果、「意向と主体性の把握」では、「仕事上の予測と問題解決」「実践の振り返り」「職場外のスーパービジョン」が正の有意な関連を示した。「主体的実行を引き出す支援」では、「自己啓発と能力発揮」「実践の振り返り」「介護福祉士としての経験年数」が正の有意な関連を示した。「関係づくり」では、「実践の振り返り」「自己啓発と能力発揮」が正の有意な関連を示した。

結論 虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践は、①「意向と主体性の把握」（虚弱高齢者の主体性を尊重しつつ意向を把握すること）、②「主体的実行を引き出す支援」（選択肢の提示や待つこと等によって虚弱高齢者の主体的実行を引き出すこと）、③「関係づくり」（自らの心を開いて接すること等によって虚弱高齢者との関係づくりをすること）の3領域が確認された。また、自らの実践を振り返っている、仕事上の予測と問題解決ができる、自己啓発と能力を発揮していると回答した介護福祉士ほど、虚弱高齢者の自己決定を尊重する実践ができていた。

キーワード 自己決定、介護福祉士、虚弱高齢者、量的研究、主体性、関係づくり

I はじめに

地域包括ケアシステムの構築や地域共生社会の必要性が掲げられる中、何らかの支援が必要

となった高齢者が、自分の思いを大切にしながら自分らしく生きることができるよう支援は、ますますその重要性を増している¹⁾。介護サービスの提供場面においても、高齢者の生活を長期

*1 四天王寺大学人文社会学部教授 *2 同非常勤講師

的に支援するケアワーカーの役割は重要である。日常生活を支援するなかで、ケアワーカーは、高齢者が自律的に生きるため、彼らの自己決定を尊重することを概念として理解できても、具体的な実践にどのように落とし込むのかは難しい。なぜならば、ケアワーカーは、高齢者が自分で決めるということを尊重しながらも、業務の多忙さから自己決定に反する決定を行ったり²⁾、高齢者と家族の間で困難な位置に立たされる場面があったりなど³⁾、ケアの専門職として、自己決定を尊重することによるジレンマや葛藤⁴⁾にさらされているからである。

本研究では、自己決定能力を持ちつつも、自分の思いよりも家族の希望を優先したり⁵⁾⁶⁾、合理的に判断したり行動したりすることが難しかったりする虚弱高齢者⁷⁾の自己決定の支援に焦点をあてる。支援する側のケアワーカーにおいては、超高齢社会を支えるために、専門職としての成熟は喫緊の課題とされている介護福祉士とする。

虚弱高齢者の自己決定について、先行研究では、高齢者は情報を理解する能力が低下し、他者からの影響を受けやすく⁸⁾、自己決定を阻害され続けるとすべてあきらめてしまう「学習された無力感」⁹⁾状態になったりすると指摘されている。また、虚弱高齢者の自己決定の過程について、岡田は介護保険のサービス利用者の自己決定の過程¹⁰⁾を指摘し、石川は、自己決定と重なり合う部分が多い自律への援助について指摘している¹¹⁾。これらを踏まえ、本研究では、虚弱高齢者の自己決定の操作的定義を、「これまで生きてきた背景の下、残された能力を駆使し、自分自身の目的と考え方に従って、価値があると判断した内容を選択し、表出し、実行する過程」とし、その過程を「意向や欲求をもつこと」「対立する意向や欲求の中から選好すること」「選好した内容に対して、自分の意向や欲求とつじつまが合っているか、社会規範や大切な人の価値と一致の程度を検討すること」「選好した内容を発信すること」「発信した内容を実行すること」とする。自己決定を尊重した実践をしている介護福祉士の関連要因をとし

ては、多様に考えられるが、自分は仕事ができるという有能感の高い介護福祉士の方が、自己決定を尊重した実践ができると考えた。なぜならば、蘇は介護サービスの質を高めるためには、介護職員の仕事に対する動機づけが重要であり、内発的動機づけの源泉である有能感に着目することは有効である¹²⁾と指摘し、筒井はより難しい仕事の遂行意欲を高める効果が最も大きいのは有能感である¹³⁾と指摘していたからである。よって、虚弱高齢者の自己決定を尊重した支援と有能感がどのように関連しているのか検討することとした。以上より、本研究では、虚弱高齢者の自己決定を支援する介護福祉士の実践の構造を明らかにし、介護福祉士の実践の構造に関連する要因を検討することとする。本研究は、介護福祉士の経験知を基礎としており、真に現場で実践できる研究であるとともに、高齢者のQOL向上に貢献するため、一定の意義を有すると考える。

Ⅱ 方 法

(1) 調査方法

機縁法により介護福祉士を対象に事前調査を実施後、質問項目を修正し、A県介護福祉士会の会員1,000名を対象に自記式調査票を用いた郵送調査を実施した。調査期間は2017年7月15～31日である。A県は人材育成に積極的な地域で、地域医療介護総合確保基金を活用した福祉人材確保総合事業や福祉人材育成認証制度等の施策を実施し、介護・福祉の仕事の見える化に努めている。このような特性をもつA県の介護福祉士会に、自らの専門性の維持・向上等を期待して入会している介護福祉士が研究対象である。よって、研究対象者は、職場外の仲間と交流するソーシャルサポートに加えて、専門的な知識や技術の伝達等の手段的サポートの授受の存在が推測される。調査票の回収は342票で、そのうち欠損がある調査票を除いた279票を分析対象とした（有効回答率27.9%）。

(2) 分析方法

1) 因子分析

虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践の構成因子を実証的に捉えるために、プロマックス回転を伴う重みなし最小二乗法で因子分析を行った。まず、虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践の構造を実証的に捉えるための質問項目の作成にあたっては、介護福祉士を対象に、「これまで介護福祉士として業務する中で、高齢者の自己決定を支援されたご経験についてお話しください」というインタビューガイドで質的調査を2016年8月に実施した。内容分析により分析した結果、27の概念が生成された。また、バイステックの7つの原則¹⁴⁾は、自己決定を支援する専門職に求められる原則であると考えたため参考にした。なお、バイステックの7つの原則のような「対人援助職の価値観」は、既に規範として周知され、多くの介護福祉士が合意していること、調査結果は高得点傾向を導くことが想定¹⁵⁾されるため、質問項目は具体的な文章となるように配慮した。このような検討の結果、虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践は、①虚弱高齢者の主体性の尊重（7項目）、②虚弱高齢者自身の「語り」の支援（7項目）、③虚弱高齢者の「主体的実行」を引き出す支援（7項目）を仮説として設定した。回答選択肢は「していない（1点）」から「している（4点）」までの4段階で設け、実践しているほど得点が高くなるように配点した。次に、有能感については、介護職員に焦点を当てた蘇の有能感尺度12項目¹²⁾を設定した。回答選択肢は「まったくそう思わない（1点）」から「非常にそう思う（5点）」までの5段階で設け、有能感が高いほど得点が高くなるように配点した。介護福祉士の有能感の構成因子を実証的に捉えるために、プロマックス回転を伴う重みなし最小二乗法で因子分析を行った。

2) 重回帰分析

虚弱高齢者の自己決定を尊重した介護福祉士の実践の構造に関連する要因を検討するために、強制投入法による重回帰分析を行った。従属変

表1 回答者の基本属性 (n=279)

	人数	%
性別		
男性	78	28.0
女性	201	72.0
年齢		
(平均年齢：49.0, 標準偏差±10.6)		
20-30歳代	56	20.1
40歳代	93	33.3
50歳代	87	31.2
60歳以上	43	15.4
介護福祉士としての経験年数		
(平均年数：12.4, 標準偏差±6.6)		
5年未満	33	11.8
5年以上10年未満	56	20.1
10年以上15年未満	96	34.4
15年以上20年未満	53	19.0
20年以上	41	14.7
介護支援専門員の資格の有無		
無し	122	43.7
有り	157	56.3
職場外のスーパービジョン		
(職場以外の専門職に相談や助言を求めていますか)		
していない	59	21.1
あまりしていない	75	26.9
まあしている	82	29.4
している	63	22.6
実践の振り返り		
(提供している自分の実践を振り返っていますか)		
していない	4	1.4
あまりしていない	23	8.2
まあしている	128	45.9
している	124	44.4

数は、虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践の因子ごとの合計素得点を投入した。独立変数は、職場外のスーパービジョン、実践の振り返り、介護福祉士の有能感の因子ごとの合計素得点の他、統制変数として、介護福祉士としての経験年数、介護支援専門員の資格の有無を投入した。介護支援専門員の資格の有無（なし=0, あり=1）はダミー変数を用いた。因子分析および重回帰分析には、IBM SPSS Ver. 24を用いた。有意水準は5%とした。

(3) 倫理的配慮

調査実施にあたっては、A県介護福祉士会会長に、調査目的を口頭と文書をもって説明し、データは個人のプライバシーの保護に十分配慮し、匿名性が確保されること等を確認し、同意書を交わした。調査対象者に対しては、調査目的を文書でもって説明した。調査票の返送および回答をもって承諾していただいたこととした。なお、本研究は四天王寺大学研究倫理審査委員会の承認（2015年6月26日承認番号16-10）を得るとともに、共同研究者の承認も得ている。

表2 介護福祉士の実践と有能感の記述統計量

介護福祉士の実践		平均値±標準偏差	介護福祉士の実践		平均値±標準偏差
虚弱高齢者の自己決定を尊重する			虚弱高齢者の自己決定を尊重する		
介護福祉士の実践			介護福祉士の実践		
虚弱高齢者の主体性の尊重		3.05±0.6	担当する高齢者の考えや行動を「良い」とか「悪い」とか判断していますか(反転項目)		2.61±0.9
担当する高齢者の考え方の傾向を把握していますか		2.91±0.7	虚弱高齢者の「主体的実行」を引き出す支援		
担当する高齢者が世間体をどの程度気にしているか把握していますか		2.94±0.7	担当する高齢者の自分で「やりたい」「決めたい」という思いを大切にしていますか		3.60±0.6
担当する高齢者の願っている事柄を把握していますか		3.13±0.6	担当する高齢者が自分で決められるように、選択肢を提示していますか		3.42±0.7
担当する高齢者の嫌いなもの、不愉快なことを把握していますか		3.02±0.6	担当する高齢者が自分で「すること」「決めること」を待っていますか		3.11±0.6
担当する高齢者の現在の興味や関心のある事柄を把握していますか		2.97±0.7	担当する高齢者が自分で「決めた」とか「できた」という感覚をもってもらうことを大切にしていますか		3.44±0.7
担当する高齢者は、自分で「すること」「決める」ことをどのように思っているかについて把握していますか		3.01±0.7	担当する高齢者が自分で「すること」「決める」ことについて、情報提供をして説明していますか		3.19±0.7
虚弱高齢者自身の「語り」の支援			担当する高齢者が自分で決めた結果、生じる可能性について想像していますか		3.32±0.7
担当する高齢者を支えている協力者を把握していますか		3.16±0.7	担当する高齢者の自己決定後に生じた望ましくない結果についても支援していますか		3.25±0.7
担当する高齢者に対して自らの心を開いて接していますか		3.38±0.6			
担当する高齢者の思いが表現しやすいように、雰囲気づくりに配慮していますか		3.42±0.6			
担当する高齢者と対等な関係であることを意識して実践していますか		3.47±0.7			
担当する高齢者の話を聞くときは、自分の感情をコントロールしていますか		3.54±0.6			
担当する高齢者の周りの人との関係を把握していますか		3.23±0.6			

(単位 点)

表3 介護福祉士の実践の構造

介護福祉士の有能感	平均値±標準偏差	因子負荷		
		第1因子	第2因子	第3因子
業務の達成				
与えられた課題をうまく遂行している	3.35±0.8			
毎日の業務を十分こなしている	3.43±0.9			
仕事の目標は常に達成している	3.05±0.8			
仕事上の予測・問題解決				
いつもと違うことが起こっても迅速かつ適切に対応できる	3.64±0.8			
仕事上の起こりうる状況を予測しながら仕事ができる	3.92±0.7			
仕事上の問題はだいたい解決できる	3.34±0.8			
能力の発揮・成長				
仕事を通じて自分の能力を伸ばし、成長している	3.53±0.8			
新たな能力を獲得するため、積極的に挑戦している	3.49±0.9			
チームの目標を達成できるように取り組んでいる	3.76±0.7			
仕事で自分の知識や技術を十分に発揮している	3.43±0.8			
チーム内で仕事上の決定をするときに、自分の意見を言える	3.92±0.8			
チーム内で自分の存在の重要性を認められるように取り組んでいる	3.49±0.8			
考え方の傾向を把握していますか		0.83	-0.10	-0.03
世間体をどの程度気にしているか把握していますか		0.74	0.06	-0.01
願っている事柄を把握していますか		0.74	0.06	-0.04
嫌いなもの、不愉快なことを把握していますか		0.69	-0.01	-0.01
現在の興味や関心のある事柄を把握していますか		0.60	0.07	0.04
支えている協力者を把握していますか		0.56	-0.02	0.07
自分で「やりたい」「決めたい」という思いを大切にしていますか		-0.15	0.79	0.03
自分で決められるように、選択肢を提示していますか		0.10	0.74	0.00
自分で「すること」「決めること」を待っていますか		0.03	0.70	-0.09
自分で「決めた」とか「できた」という感覚をもってもらうことを大切にしていますか		0.05	0.69	0.02
自分で「すること」「決める」ことについて、情報提供をして説明していますか		0.05	0.63	0.06
自らの心を開いて接していますか		-0.03	-0.09	0.77
思いが表現しやすいように、雰囲気づくりに配慮していますか		0.15	0.04	0.65
対等な関係であることを意識して実践していますか		-0.05	0.10	0.60
プロマックス回転後の因子寄与	5.89	1.50	1.22	
プロマックス回転後の因子寄与率(%)	42.09	10.70	8.73	
Cronbachのα係数	0.85	0.84	0.73	
平均値 ¹⁾ (標準偏差)	3.04	3.35	3.42	
	(0.5)	(0.5)	(0.5)	
第1因子：意向と主体性の把握	1.00			
第2因子：主体的実行を引き出す支援	0.63	1.00		
第3因子：関係づくり	0.56	0.58	1.00	

注 1) 因子ごとの合計素得点の平均値を項目数で除したものと
2) 因子抽出法：重みなし最小二乗法、回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

Ⅲ 結 果

(1) 回答者の基本属性 (表1)

女性が72.0%と多数を占め、平均年齢49.0歳(標準偏差±10.6歳)、介護福祉士としての平均経験年数12.4年(±6.6年)、43.7%が介護支援専門員の資格を取得していた。

(2) 介護福祉士の実践と有能感の記述統計量 (表2)

虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践の中では、「担当する高齢者の自分で「やりたい」「決めたい」という思いを大切にしていますか」が3.60で最も高く、介護福祉士の有能感の中では、「仕事上の起こりうる状況を予測しながら仕事ができる」と「チーム内で

仕事上の決定をするときに、自分の意見を言える」が3.92で最も高かった。

(3) 介護福祉士の実践の構造 (表3)

因子負荷量の小さい変数を削除した因子分析の結果、第1因子「意向と主体性の把握6項目」、第2因子「主体的実行を引き出す支援5

項目」, 第3因子「関係づくり3項目」の14項目3因子が抽出された(累積寄与率は61.5%)。また, それぞれの因子のCronbachの α 係数を求めた結果, いずれの因子も0.73以上の高い値を示しており, 介護福祉士と研究者によるエキスパートレビューを受けており, 信頼性と内容妥当性を有していると判断した。

(4) 介護福祉士の有能感の構造(表4)

因子負荷量の小さい変数を削除した因子分析の結果, 「業務の達成3項目」「仕事上の予測と問題解決3項目」「自己啓発と能力発揮3項目」の3因子が抽出された(累積寄与率は70.7%)。また, それぞれの因子のCronbachの α 係数を求めた結果, いずれの因子も0.69以上

表4 介護福祉士の有能感の構造

	因子負荷		
	第1因子	第2因子	第3因子
与えられた課題をうまく遂行している	0.98	-0.05	-0.02
毎日の業務を十分こなしている	0.81	0.01	-0.08
仕事の目標は常に達成している	0.52	0.05	0.20
いつもと違うことが起こっても迅速かつ適切に対応できる	-0.05	0.85	-0.01
仕事上の起こりうる状況を予測しながら仕事ができる	-0.08	0.79	0.02
仕事上の問題はだいたい解決できる	0.23	0.60	-0.06
仕事を通じて自分の能力を伸ばし, 成長している	0.03	-0.12	0.89
新たな能力を獲得するため, 積極的に挑戦している	-0.06	0.05	0.56
チームの目標を達成できるように取り組んでいる	0.04	0.31	0.44
プロマックス回転後の因子寄与	3.88	1.32	1.17
プロマックス回転後の因子寄与率(%)	43.11	14.61	12.98
Cronbachの α 係数	0.83	0.79	0.69
平均値 ¹⁾ (標準偏差)	3.28 (0.70)	3.63 (0.63)	3.59 (0.63)
第1因子: 業務の達成	1.00		
第2因子: 仕事上の予測と問題解決	0.48	1.00	
第3因子: 自己啓発と能力発揮	0.51	0.47	1.00

注 1) 因子ごとの合計素得点の平均値を項目数で除したもの
2) 因子抽出法: 重みなし最小二乗法, 回転法: Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

表5 介護福祉士の実践の重回帰分析結果

	意向と主体性の把握		主体的実行を引き出す支援		関係づくり	
	β 値	t 値	β 値	t 値	β 値	t 値
介護福祉士としての経験年数	0.09	1.53	0.16	2.77**	0.02	0.31
介護支援専門員 (資格なし=0, 資格あり=1)	-0.05	-0.97	-0.07	-1.25	-0.03	-0.60
職場外のスーパービジョン	0.11	2.08*	0.09	1.57	0.07	1.19
実践の振り返り	0.22	3.51**	0.22	3.46**	0.33	5.14***
有能感第1因子: 業務の達成	0.03	0.49	0.01	0.13	0.00	0.03
有能感第2因子: 仕事上の予測と問題解決	0.26	4.25***	0.07	1.09	0.11	1.70
有能感第3因子: 自己啓発と能力発揮	0.10	1.49	0.24	3.48**	0.14	1.99*
R ²	0.27		0.24		0.23	
モデルのF値	14.40***		12.28***		11.85***	

注 * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

の値を示しており, 介護福祉士と研究者によるエキスパートレビューを受けており, 信頼性と内容妥当性を有していると判断した。

(5) 介護福祉士の実践の重回帰分析結果(表5)

「意向と主体性の把握」では, 「仕事上の予測と問題解決」が0.1%水準で, 「実践の振り返り」が1%水準で, 「職場外のスーパービジョン」が5%水準で正の有意な関連を示した。「主体的実行を引き出す支援」では, 「自己啓発と能力発揮」「実践の振り返り」「介護福祉士としての経験年数」が1%水準で正の有意な関連を示した。「関係づくり」では, 「実践の振り返り」が0.1%水準で, 「自己啓発と能力発揮」が5%水準で正の有意な関連を示した。以上3つの重回帰モデルのF値はすべて0.1%水準で有意であったため, これらの重回帰モデルは有効であると判断した。なお, VIF値はいずれも1.7未満であり, 独立変数間に多重共線性がないことを確認した。

IV 考察

(1) 介護福祉士の実践の構造

因子分析の結果, 「意向と主体性の把握」「主体的実行を引き出す支援」「関係づくり」の3因子が抽出され, 虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践は, ①虚弱高齢者の主体性の尊重, ②虚弱高齢者自身の「語り」の支援, ③虚弱高齢者の「主体的実行」を引き出す支援の3つの領域で構成した仮説とほぼ一致した構造を示した。「意向と主体性の把握」は, 介護福祉士が虚弱高齢者の考え方の傾向, 世間体をどの程度気にしているか, 願っている事柄等の把握等の

項目から構成された。このような結果は、石川の言う「行為主体性としての存在を認める支援」¹¹⁾であり、援助者が考えた望ましい生活に近づくために支援するのではなく、本人が望む生活に近づくために援助者は支援するという指摘¹⁶⁾を支持する。つまり、虚弱高齢者の主体性を尊重しつつ意向を把握することが重要であること⁷⁾が確認された。しかし、「意向と主体性の把握」の平均値は最も低く、介護福祉士は高齢者の思考傾向を把握することを難しいと感じており、虚弱高齢者の言動の背後にある意向を理解する重要性¹⁴⁾も再確認された。

「主体的実行を引き出す支援」は、自分で「やりたい」「決めたい」という思いを大切にすると、自分で決められるように選択肢を提示する、自分で「すること」「決めること」を待つといった項目から構成された。このような結果は、石川の言う「選好と表出を引き出す支援」¹¹⁾であり、自分で決められるように選択肢を提示することは、本人にとって理解可能な形で情報提供するという指摘¹¹⁾を支持する。また、自分で「やりたい」「決めたい」という思いを大切にするという基本姿勢と、自分で「すること」「決めること」を待つという実践は、虚弱高齢者に意向を表出して良いかもしれないという安心感を抱かせたり、尊重されているという自己肯定感を感じさせたり、考える時間を提供することができるという指摘⁷⁾を支持する。これらの実践が不在であれば、他の環境下では選ばないであろう選択肢を、選ばざるを得ない状況¹¹⁾になるかもしれないため、介護福祉士にとっては重要な実践であることが確認された。

「関係づくり」は、自らの心を開いて接する、思いが表現しやすいように、雰囲気づくりに配慮する、対等な関係であることを意識するといった項目から構成された。これらの項目は、虚弱高齢者自身の「語り」の支援であるともいえる。このような結果は、介護福祉士の支援は高齢者との関係づくりが基盤で、高齢者との肯定的な関係が重要である¹²⁾という指摘を支持する。また、援助者は絶えず対等な関係に立つことの困難さを意識しなければならない¹⁷⁾という

指摘があるように、ケアの場面では、援助者と利用者の対等な関係は成立し難いが、対等な関係であることを意識することが、「関係づくり」に連動するものと考えられた。さらに、援助関係を築くためには、援助者自身の自己開示が求められる¹⁸⁾という指摘があるように、介護福祉士が自らの心を開いて接することの重要性が確認された。

(2) 介護福祉士の実践に関連する要因

「実践の振り返り」は、虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践のすべてに有意な関連がみられた。自らの実践を振り返っている介護福祉士ほど、虚弱高齢者の自己決定を尊重する実践をしていた。実践の振り返りについては、渡邊らが介護福祉士のキャリア形成過程において省察が重要である¹⁹⁾という指摘を支持する結果であり、介護福祉士がより良い支援を提供するためには、自分の実践を振り返ることが重要であることが確認された。

次に、「実践の振り返り」以外では、「意向と主体性の把握」において「仕事上の予測と問題解決」が正の有意な関連を示した。つまり、いつもと違うことが起こっても迅速かつ適切に対応できる、仕事上の起こりうる状況を予測しながら仕事ができると思っている介護福祉士ほど、虚弱高齢者の意向の把握ができていた。人間の意向は流動的で変化することが多い。流動的な意向の把握とマニュアルどおりにはいかない仕事の遂行とは関連があることが確認された。専門職には想像性や柔軟性を伴う創造的な思考力が求められる²⁰⁾という指摘を支持した。また、職場外でスーパービジョンを受けている介護福祉士ほど、虚弱高齢者の意向を把握していた。職場内のスーパービジョン体制は十分に整備されていない現状²¹⁾において、専門職としての能力向上を目的とした職場外のスーパービジョンの重要性が確認された。

「主体的実行を引き出す支援」において、「自己啓発と能力発揮」が正の有意な関連を示した。つまり、仕事を通じて自分の能力を伸ばし成長している、新たな能力を獲得するため積極的に

挑戦している介護福祉士ほど、虚弱高齢者の主体的実行を引き出す支援ができていた。選好する能力が高くない虚弱高齢者が理解できるように、五感を活用して情報を提供すること⁷⁾、そして、その表出を引き出す支援をするためには、操作・誘導的な関わりを避け、抑圧的に機能しないようにすることが介護福祉士に求められる。高いスキルが求められる選好や表出の支援は、より高い能力を目指し、その実現に向けて挑戦することと関連していたと推測された。また、経験年数が高い介護福祉士は、高齢者に対する理解力や対応力が培われている¹²⁾という指摘のように、「介護福祉士としての経験年数」が長いほど、虚弱高齢者の主体的実行を引き出す支援ができていた。

「関係づくり」においても、「自己啓発と能力発揮」が正の有意な関連を示した。つまり、仕事を通じて自分の能力を伸ばし成長している、新たな能力を獲得するため積極的に挑戦している介護福祉士ほど、関係づくりができていた。介護福祉士は高齢者との人間関係を基盤とし、生活支援を行っていく専門職であるという指摘²⁾を支持する結果となり、「関係づくり」の重要性が確認された。一方、虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践のいずれにおいても、「業務の達成」は有意な関連がみられなかった。与えられた課題をうまく遂行している、毎日の業務を十分こなしているといった「業務の達成」は、手順や段取り等が決まった業務、創意工夫が少ない業務等を、確実に効率よく遂行していることを意味している。虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践には、既成概念を取り払って、いつもの業務をもう一度違う角度から見直したり、想像性や柔軟性を伴う創造的な思考力が求められることが確認された。

V 結 論

本研究により、虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践は、①「意向と主体性の把握」（虚弱高齢者の主体性を尊重しつつ意向

を把握すること）、②「主体的実行を引き出す支援」（選択肢の提示や待つこと等によって虚弱高齢者の主体的実行を引き出すこと）、③「関係づくり」（自らの心を開いて接すること等によって虚弱高齢者との関係づくりをすること）の3領域で構成されていることが明らかになった。自らの実践を振り返っている介護福祉士ほど、虚弱高齢者の自己決定を尊重する実践ができていた。また、「意向と主体性の把握」では、「仕事上の予測と問題解決」が正の有意な関連を示し、「主体的実行を引き出す支援」と「関係づくり」では、「自己啓発と能力発揮」が正の有意な関連を示した。一方、3領域のいずれにおいても、「業務の達成」は、有意な関連を示さなかった。研究の限界として、重回帰分析の決定係数の値が低いことから、虚弱高齢者の自己決定を尊重する介護福祉士の実践の関連要因は有能感以外にも考えられるため、独立変数の検討が求められる。また、対象地域も一都道府県の介護福祉士会に限定しており、有効回答率も3割を切っていることから、本研究の結果をもって直ちに一般化することはできないため、調査対象の選定と方法に関する検討が求められる。

謝辞

本研究の実施に当たり、ご多用の中調査にご協力いただきました介護福祉士の皆様に感謝申し上げます。なお、本研究は科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（c）課題番号15k04020の一環として行われたものです。本研究において利益相反は存在しない。

文 献

- 1) 鶴若麻理, 大桃美穂, 角田ますみ, アドバンス・ケア・プランニングのプロセスと具体的支援-訪問看護師が療養者へ意向確認するタイミングの分析を通して-, 生命倫理 2016; 26(1): 90-9.
- 2) Dwyer S. Older People and Permanent Care: Whose Decision?, British Journal of Social Work 2005; 35(7): 1081-92.
- 3) 須加美明. 訪問介護の評価と専門性, 東京 日本

- 評論社 2013：288.
- 4) 衣笠一茂. ソーシャルワークの「価値」の理論構造についての一考察：「自己決定の原理」がもつ構造的問題に焦点をあてて, 社会福祉学 2009；49(4)：14-26.
 - 5) 角田ますみ. 高齢者ケアにおける「自己決定」, 臨床看護 2004；30(12)：1840.
 - 6) 空閑浩人. 日本人の文化とソーシャルワーク：受け身的な対人関係における「主体性」の把握, 社会福祉学 1999；40(1)：113-32.
 - 7) 笠原幸子. 虚弱高齢者の生活行動における自己決定に関する研究－具体的支援方法に焦点をあてて－, 四天王寺大学紀要 2016；61：7-19.
 - 8) 酒井忠昭. 高齢患者の自己決定：医療の側面から老年期における自己決定のあり方に関する調査研究, 東京：国際長寿センター, 1998：15.
 - 9) M. セリグマン. 津田彰監訳：学習性無力感：パーソナル・コントロールの時代をひらく理論, 大阪：二瓶社 2000：28.
 - 10) 岡田進一. ケアマネジメント論, 東京：ワールドプランニング, 2011：75.
 - 11) 石川時子. 能力としての自律－社会福祉における自律概念とその尊重の再検討－, 社会福祉学 2009；50(2)：5-17.
 - 12) 蘇珍伊, 岡田進一, 白澤政和. 特別養護老人ホームにおける介護職員の仕事の有能感に関連する要因－利用者との関係と職場内の人間関係に焦点をあてて, 社会福祉学 2007；47(4)：124-35.
 - 13) 筒井美紀. 周辺市場・若年女性労働者の「より難しい仕事の遂行意欲」の規定要因－自己有能感の重要性, 教育社会学研究 2001；68：147-65.
 - 14) F.P.バイスティック. 尾崎新, 他訳. ケースワークの原則〔新訳改訂版〕－援助関係を形成する技法, 東京：誠信書房, 2006：26.
 - 15) 笠原幸子. ケアワーカーが行う高齢者のアセスメント－生活全体をホリスティックにとらえる－, 京都：ミネルヴァ書房 2014：209.
 - 16) 船曳宏保. 社会福祉学の構想, 東京 新評論：1993, 61-2.
 - 17) 本田勇. 利用者－援助者関係のバランス 援助するひとと援助されるひととは, どこまで対等になれるか, 児島亜紀子編, 社会福祉実践における主体性を尊重した対等な関わりは可能か－利用者－援助者関係を考える, 京都 ミネルヴァ書房, 2015：172-99.
 - 18) Gorden Thomas, W. Sterling Edwards. Making the Patient Your Partner, 近藤千恵監訳, 田淵保夫・田淵節子訳, 医療・福祉の人間関係論, 東京丸善, 2000.
 - 19) 渡邊泰夫, 笠原幸子. 主体的に学ぶ介護福祉士のキャリア形成過程に関する研究, 四天王寺大学大学院研究論集 2019；13：51-62.
 - 20) Sheafor WB, Charles R. H. Techniques and Guidelines for Social Work Practice 6th Ed, London Pearson Education, 2003：41.
 - 21) 三好明夫. 特別養護老人ホームの介護職員が必要とするスーパービジョンについての研究－介護職員を対象としたグループインタビュー調査の結果より, 人間関係学研究 2009；16(1)：1-12.
 - 22) 宮堀真澄, 澤井セイ子, 佐藤怜, 他. 特別養護老人ホームにおける介護職員の社会的スキルに関する研究, 日本赤十字秋田短期大学紀要 2003；8：31-9.